

クララ

板牧 俊子 文

矢野 滋子 絵



クララ

坂牧 俊子 文
矢野 滋子 絵



女子パウロ会

はじめに

これは、いまからやく八〇〇年くらいまえに、イタリアの小さな町、アシジに生まれた美しい貴族のむすめクララが、キリストさまのこの世での一生を送りながら、ぜいたくなくらしをすて、きよらかなすみれの花のような一生を送り、聖人となるまでのおはなしです。

八〇〇年もむかしのクララの生活は、いまのわたしたちのものとはずいぶんちがっているでしょうが、神さまへの愛、まわりの人々への愛の心は、わたしたちも同じように持つことができます。

そして、いまのように、物があまるほどある世の中に生きているわたしたちは、なぜクララが、この世のぜいたくをすっきりすてて、神さまのことだけを考へる生

活をえらんだのか、考へてみる必要があると思います。

さあ、これからいっしょに、むかしむかしのイタリアの小さな町を、そっとのぞきにいってみましょう。



もくじ

はじめに

1 アシジの美しい少女

クララとフランシスコ 8

フランシスコの回心 29

すべてをすてて 37

「むすめたちを取り返せ！」 39

2

ばろをまとった天使

院長さま 64

愛の路らい 81

フランシスコの死 89

クララ会の変展 100

3

ふしぎなおめぐみ

柳さまのおたすけ 112

イエズスさまのおくるしみ

天からのおむかえ 140

125



1
アシジの美しい少女



クララとフランシスコ



ここは、イタリアの都ローマから、北へ二〇〇キロほどはなれた小高いおかの上の町、アシジです。白く光るオリーブの木々の向こうに、うす緑色のウンブリア地方の広い野原が美しくひろがって見えます。

この町の貴族、オフレドゥツィオの家は、いまよろこびにあふれていました。長い間子どもができないのを悲しんで、聖地巡礼（イエズスさまの生活された所）を、いのりながらたずねることまでして、子どもがさずかるようにいのっていたオルトラーナ夫人に、かわいい女の子が生まれたのです。広がりっぱな原敷の中を、めしつかいたちがいそがしそうに、行ったり来たりしています。おいわいにやってきた大ぜいのお客さまたちのおもてなしに、大いそがしなのです。



でも、主人のフアパローネは、あまりうれしそうではありません。なぜなら、将来、この名譽ある貴族の家をりっぱについでくれる男の子がほしかったからです。それに、そのころは皇帝と教皇がにらみあい、都市と都市がけんかをし、市民と貴族があらそって、一日も平和な日のない戦国時代でしたから、なおさら武士になつて、りっぱなてがらをたててくれるような、強い男の子がほしかったのかもしれない。

でも、オルトラーナ夫人は、自分によく似た美しい女の子を、しあわせそうにながめていました。ピンクのレースにかざられたゆりかごの中で、すやすやとねむるこの赤ちゃんに、名まえはなんとつけましょう？

それを考える必要はありません。なぜなら、この子の名まえは、生まれるまえからもう決まっていたからです。というのは、もうじき赤ちゃんが生まれるというころ、夫人が教会の十字架の二像の前でおいのりをしていて、どこからか、ささやく声が聞こえました。

「おそれはいけません。あなたは、世界をてらす光の子を安らかに生むでしょう。その子は、『光りかがやくもの』とよばれるでしょう。」

「クララ」というのは、そういう意味なのです。

そのころ、同じ町に住むお金持ちの織物商人、ピエトロ・ベルナルドネの家に、十二歳になるフランシスコという少年がいました。

いつも楽しげなほほえみをうかべたこの美少年は、遊ぶのが大好きで、とくに歌が上手でした。

たくさんのお友だちを集めては、町じゅうをうたつて歩き、遊び仲間の『王さま』でした。お金持ちのむすこらしく、服もぜいたくな物を着ていましたが、まずしい人にはたいへんしんせつでした。物ごいを見ると、おしげもなくお金をつかんでわたしました。あるときには、遊びに夢中で、つい、「うるさい！」と言って追いはらった物ごいのとを追いかけていき、たくさんのお金をわたして、あやまったこと

もありました。

——ばくの家は借金持ちなのだから、まずしい人にかけてあげるのはあたりまえだ——と、思っていたのです。

でも、お父さんのピエトロは、そんなフランシスコが心配でたまりません。むすこには、お店のあとをついで、たくさんお金をもうけてもらいたいのに、フランシスコのほうは、使うことばかり考えていたからです。

でも、町の人たちは、なまけおかくて、美しいフランシスコを、「少年の花」とよんで愛していました。

いっぽう、クララは、信仰の深いお母さまにたいせつに育てられ、おいのりも熱心にしていました。フランシスコと同じように、お金持ちのクララは、食べ物にも、着る物にも不自由していませんでしたが、いつもまずしい人のことを考えていました。この世の中には、家もパンもない人、だれも世話をしてくれない病人、すてら

れた子どもや老人のいることを知って、じっとしていられませんでした。友だちや家の人と外へ出るときは、かならずお金をたくさん持っていき、物ごいにかけてあげるのです。まだ四つか五つの小さい女の子であるクララが、そのかわいらしい手でお金をわたし、にっこりはえむようすは、まるで天使のように見えました。

おなかのすいている人を見ると、自分のおさから、いちばんおいしそうなおちそうをそっと残して、持って行ってあげますし、親のない子どもたちには、自分のたいせつにしているおもちゃでもあげてしまうのでした。

こんなクララとフランシスコの二人は、このうち、どんなふうにめぐりあい、神さまにみらびかれて、どんな道をたどるのでしょうか。

フランシスコが二十一歳になったころ、アシジの町も、ついに戦争にまきこまれました。

市民たちが、日ごろいばっている貧乏たちをおそって、その屋敷に火をつけたり